

前置詞の捉え方と考え方

—特に次元との関係を中心に—

小寺 茂明

1. はじめに

前置詞については学校ではあまり体系的に指導されることもなく、また前置詞の視点から英語を見ることもあまりなされてこなかったのではないかと思う。実は前置詞を、とりわけ次元という観点から眺めてみると、英語の世界の切り取り方・認識の仕方もかいま見られ、面白いことがいろいろと見えてくるものである。このことをよく理解すれば、英語に対する見方もあるいは変わるかもしれない。ここでは前置詞についての基本中の基本とも言ふべきこととして、まず「前置詞の捉え方と考え方」について簡単に取り上げてみたい。

2. まずは基本的な考え方から

ここでは基本的な問題として、まず「次の文の空所に入れる前置詞としては at, on, in のいずれが適当であろうか」というところから始めてみよう。

- (1) Turn right () the next corner.
—Swan (1995²:78)
- (2) They were alone () the tennis court.
- (3) My coat is () the wardrobe.
—Greenbaum and Quirk (1990:192)
- (4) a. There were a lot of people () the shop. It was very crowded.
b. Go along this road, then turn left () the shop.
(somebody giving directions)
- (5) a. There is some water () the bottle.
b. There is a label () the bottle.
- (6) a. There is somebody () the door.
Shall I go and see who it is?
b. There is a notice () the door. It says 'Do not disturb.'

—Murphy (1994²:244)

まず、(1)~(3)についてであるが、これらには at, on, in が、それぞれその順序で入る。

- (1) Turn right (at) the next corner.
(次の角を右に曲がりなさい.)
- (2) They were alone (on) the tennis court.
(彼らだけがテニスコートにいた.)
- (3) My coat is (in) the wardrobe.
(私のコートは洋服だんすの中にある.)

これらはいずれも at, on, in の最も基本的な用法であり、このこと自体に何の問題もないであろう。

次に、(4)~(6)についてであるが、これらは比較してみるようにということで Murphy (1994²:244) に挙げられている例であり、答えは以下ようになる。

- (4) a. There were a lot of people (in) the shop. It was very crowded.
b. Go along this road, then turn left (at) the shop.
- (5) a. There is some water (in) the bottle.
b. There is a label (on) the bottle.
- (6) a. There is somebody (at) the door.
Shall I go and see who it is?
b. There is a notice (on) the door. It says 'Do not disturb.'

いずれも、atは点、onは面、inは空間という認識に基づいて比較的容易に区別できるであろう。もっとも、これら両者(ペア)の区別には文脈や状況の中での基本的な判断が求められるところではある。

3. 前置詞をよりよく理解するための図解的な説明

次に、次のページに挙げた図解について検討してみよう。ここではこの図解について少し具体的に説明しておきたい。

Positive		Negative		
Destination	Position	Destination	Position	
<i>to</i> → ●	<i>at</i> ○●	<i>(away) from</i> ● →	<i>away from</i> ● ○	Dimension-type 0 (point)
<i>on (to)</i> ↓ _____	<i>on</i> ○ _____	<i>off</i> ↖ _____	<i>off</i> ○ _____	Dimension-type 1 or 2 (line or surface)
<i>in (to)</i> ↓ □	<i>in</i> ○ □	<i>out of</i> ↖ □	<i>out of</i> ○ □	Dimension-type 2 or 3 (area or volume)

[Greenbaum and Quirk (1990:191)]

Greenbaum and Quirk (1990:191-192)はこの前置詞の説明に次の3つの区別を取り入れている。すなわち、前置詞の分類基準を次のように示しているのである。

- (1) 前置詞は意味の観点からは肯定的な(positive)ものと、否定的な(negative)ものとに分けられる。たとえば *on* に対して *off* は *not on* の関係にあるということなどである。
- (2) 前置詞は、動きを伴う「到着点」(destination)〔意図された位置への動き(movement with respect to an intended location)〕を表すか、動きを伴わない「位置」(location)〔静的な位置(static location)〕を表すかで区別される。たとえば *to* は動きのある方向(への移動)を意味するが、*at* は位置としての静止した点を表すということなどである。
- (3) 前置詞に関しては3つの「次元のタイプ」(dimension types)がある。
 - a. 1つ目の次元のタイプは「ゼロ次元なもの」とみなす場合。実際には大陸のような大きなものであったとしても、それを「点」(point)として扱い、次元をまったく無視する場合である。

He walked *to the lamppost*.

They flew *to Australia*.

- b. 2つ目の次元のタイプは「一次元的または二次元的なもの」とみなす場合。「線または面」(line or surface)として扱われる。(これは

2つの次元にまたがる。)

She put her toe *on the line*.

They were alone *on the tennis court*.

- c. 3つ目の次元のタイプは「二次元的または三次元的なもの」とみなす場合。「領域または容積」(area or volume)として扱われる。(これは2つの次元にまたがる。)

Some cows were grazing *in the field*.

My coat is *in the wardrobe*.

—Greenbaum and Quirk (1990:192)

これらのうちの(1)は、意味の理解という点では基本的に大切な事柄である。

また、(2)もおおいに注意すべきことである。つまり、前置詞はしばしば動きを伴う解釈が必要であるということである。しかも、全体としては、前置詞が形の上で動的・静的の意味が区別されることはむしろ少ないことに注意する必要がある。つまり、見たい目は同形の場合が多いということである。これは日本人には意外に盲点となりがちなものであるから要注意である。このことについては、ここでは次のような *under* の例を参照されたい。

- (4) a. The rat ran *under* the table.

(ねずみはテーブルの下へ走って入っていた。) [run TO under]

- b. The rat ran *under* the table.

(ねずみはテーブルの下を走った。)

[run AT under]

- c. The rat ran *from under* the table.

(ねずみはテーブルの下から走って出てきた。) [run FROM under]

—池上(1991:21-22)

これらについて池上(1991)を参考にすれば、概略、次のように説明できる。つまり、aとbはまったく同じ文であるが、深層構造的にはaの文ではTO underと動的に解され、bの文ではAT underと静的に解される。cは、従来の考えではもちろん二重前置詞であるが、ここでは文字どおりFROM underと動的に解されることになる。したがって、cではFROMが表層構造として前置詞が実現されているが、a、bではAT(静的)とTO(動的)は表層構造としては表現されず、いわばゼロとして実現されていると考えられる。これらの区別はいわば目に見えない部分であるので、この部分はその意味では日本人

にはわかりにくい表現とも言える。当然、具体的な意味解釈には文脈などによる判断が必要ということになる。

最後に、(3)についてであるが、上で記した3つのカテゴリー上の区別は大切なことで、これが基本となっているいろいろなことが説明されることになる。実際、この3つの次元の関係は大切であり、これは前置詞の基本的なイメージをつかむのにおおいに役に立つ図解である。筆者は講義で言及するときなどには学生に、これを何も見ずに手書きで作成できるようにと指示をしているくらいである。

なお、上述のように、一次元と二次元ないしは二次元と三次元にまたがる場合があるが、これは具体的にはそれぞれの場合の状況判断によることになるであろう。ちなみに、上のonの場合、lineの例では文字どおり線であるが、tennis courtの例では(日本語でもコートは一面、二面と言って数えるので)まさに面としてのコートを表していると言えよう。島、大陸、海岸などもonである。また、take off という「離陸する」という意味のイディオムがあるが、そのoffは(地)面から離れていくという感じがよく出ているのではないか。まさに「離陸する」である。そしてinの場合は、平面的なarea(領域)の場合と、容積のあるvolume(立体)の場合とが考えられる。

さらにこれに関連して、例えばSwan (1995²:79)は、inについては“position inside large areas, and in three-dimensional space”の意味に用いられると説明し、次のような例を挙げている。

(5) He lived *in the desert* for three years.

(6) I last saw her *in the car park*.

—Swan (1995²:79)

これらはいずれも平面的な「広い土地・領域・地域」(large areas)の意味で用いられているものと考えられる。

4. out ofの意味はfromとどう違うのか

ところで、中学校で習う英語の中で例えば「彼は家の中から出てきた」を英語でどう言うかという場合に、fromかout ofかについて悩むということはよくあるが、それは上の図解をよく見ていると解けそうである。実は、これは筆者もかつては疑問に思っていたことの1つであるが、この場合、なぜfrom

が適切ではないのかということである。この疑問については、fromは「起点」を表すだけのゼロ次元の点的(存在としての)表現であるが、out ofは「～の中から外へ」という意味の三次元的な広がりイメージをもつ表現であると考えれば、図解からおのずとout ofが選択される理由が了解されよう。家という空間(space)の中から外に出てくるのであれば、inの反対であるout ofがふさわしい道理である。もちろん、次が正解である。

(1) He came *out of* the house.

同じことは次のような例でも言える。

(2) Don't lean so far *out of* the window. It's dangerous.

(3) I saw him come *out of* the hotel.

(4) She's coming *out of* the office now.

—LDOCE⁴のofの項

前置詞の世界では、次元のレベルでの認識の仕方、つまり、点か、線か、平面か、あるいは容積(または領域)をもつか、などのイメージでの使い分けが基本的に大切なことなのである。点的な位置やその移動というイメージならat/fromの世界であり、面としての位置や移動というイメージならon/offの世界であり、そして立体の空間としての位置や移動というイメージならin/out ofの世界なのである。

なお、上記の疑問には、日本語では同じ「～から」と訳される場合でも、起点という点的位置関係としての認識なのか、それとも空間(または領域)としての三次元的位置関係としての認識なのかというような違いが説明されれば、中学生や高校生にも理解されるであろう。また、この図解を見れば、それはむしろ一目瞭然のことであろう。このような図解を有効に利用し、その語感やイメージを把握させたいものである。そして、初心者ほど日本語(訳)にとらわれる傾向が見られるので、注意したいところだ。

さらに類似の使い分けの具体的な例を見ておこう。たとえば「～の中に入るな」という意味で、次のような表現がある。

(5) Keep *off* the grass.

(6) Stay *out of* the building.

ここでは、次元というものの感覚的な捉え方の重要性について特に強調しておきたいわけであるが、もうこれらの例は楽に理解できるはずである。grassは面であるから二次元の世界であり、buildingは空

間であるから三次元の世界である。それぞれ、offとout ofとが使い分けられているのである。

かくして、「窓から(顔を出して)外を見る」という意味の場合でも、look out of the windowのようにfromを用いないことが納得できるであろう。立体的な空間イメージの表現だからである。また、上の(2)では、「身を乗り出して」の感じがよく出ていることが実感できるであろう。

5. むすび

以上、実は前置詞を次元という観点から眺めると、英語の世界の切り取り方・認識の仕方もかいま見られ、面白いことがいろいろと見えてくることを、具体的な例を挙げながら検討してきた。前置詞を、肯定と否定の対照、位置の移動と静止、そしてとりわけ次元との関係から理解できれば、英語のしくみについて納得できる部分が少なくないであろう。これまで、これらのことが十分に指導されてきたとは言えないのではないかと思われるが、その意味では、現在の英語教育では何か大切な点が欠落している気がしないでもないのである。前置詞から見たもう1つの英語の世界を指導してもよいのではないだろうか。本稿の中に授業などで指導に生かせる部分が少しでもあれば、活用していただければ幸いである。

参考文献

- Greenbaum, S. and R. Quirk (1990) *A Student's Grammar of the English Language*. London: Longman.
- 池上嘉彦 (1991) 『〈英文法〉を考える—〈文法〉と〈コミュニケーション〉の間』 東京：筑摩書房
- 小寺茂明・吉田晴世 (2005) 『英語教育の基礎知識—教科教育法の理論と実践』 東京：大修館書店
- Murphy, R. (1987, 1994²) *English Grammar in Use*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Summers, D. et al. (ed.) (2003⁴) *Longman Dictionary of Contemporary English*. Harlow, Essex: Longman. [LDOCE⁴]
- Swan, Michael (1980, 1995²) *Practical English Usage*. Oxford: Oxford Univ. Press.